ひとりひとりの子どもをみつめて⑦

赤羽　美代子

五月中旬の、ちょっと汗ばむ暖かい日でした。園庭の一隅にある、小高い、小さな小山での出来事です。その日、私は園舎のテラスより、S子（5歳・女）F子（S子の妹・三歳）N夫（五歳・男）が、穴を掘っている姿を見ました。S子が、やや長めの髪の毛を横顔にタラリとたらし、スコップ（子ども用）に力を入れるたびに、S子の長髪の毛がユラリ、ユラリと揺れる様は、S子がいかに穴掘りに真剣であるかがうかがえます。又、N夫も、S子の隣りで、スコップに力を入れては土を掘り起こし、あたりに土をまき散らしています。三歳児のF子は、ふたりの側にそっと立って、この穴掘りを見守っている光景です。

私はブラリと、通りすがりの人のように、その穴の側に立ってみました。深さは浅いが子どもがひとり、座れる程の大きさの穴が掘られています。私を見つけて、手を繋いできた三歳の女児が、その穴を見つけて「先生S子ちゃんたち、何、掘ってんの？」と聞きます。その問いで、私のいる事に気がついたS子は、幾分照れたように、はにかみながら「先生、私たちね、Fちゃんの仇とるのよ、〃落し穴〃つくってね、Mちゃんをそこへ落しちゃうの」N夫「そうだよ。この穴の中に水、入れてねー」と言う。

そのMちゃんは、口のきけない障害児です。今年の四月には、小学一年生になる筈の女児でしたが、後、一年間、幼稚園の年長組に残りました。Mちゃんは、今年の始園式で、丸顔で、お目めがパッチリ、クリクリと太った新入園児のF子ちゃんを、一目で気に入ってしまいました。四月中は、F子ちゃんを見つけると、泥や水を掛けたり、Fちゃんの髪の毛を思いきり引っ

ぱったりするのです。Fちゃんは、脅えて、Mちゃんから逃げ廻る日がつづきました。

教師は、そうしたMとF子の関係について毎日、いろいろと工夫をし、思案するのですが、何しろ、F子を気に入ってしまったMは、積極的に出るF子への行動の早いこと……。MとF子が落ち着いて遊んでいるなと思っているうちに、「Mちゃんが髪の毛を引っぱったー」とF子の泣き声です。今、園庭の端と端に位置して、ふたりは遊んでいたのに、Mは、つかの間にF子の側に立っているのです。

五月に入り、F子の被害も数が減ってきましたが、きょうは泥をかけられて、F子が泣いた事から、姉のS子がF子の仇討ちをする事になったようです。

Mちゃんを見ますと、いつもの泥んこ遊びに熱中しています。S子、N夫が洗面器を持って水を汲みに行きました。いよいよ、穴の中に水を入れる作業が始まったのです。

N夫は容器に半分程水を入れて、そろり、そろりと帰って来ます。N夫は途中で、Mが泥遊びに夢中になっている前を通過しました。丁度その時、N夫の容器から、鉛筆程の細さの水が、Mの泥んこの中に流れ落ちました。Mは、突然の出来事が理解できず、すっと立ち上がり、N夫の後姿をじっと見送っていましたが、N夫の誘いとでも思ったのか「ミジュ、ミジュ」(Mと日ごろ接触している者のみに解釈できることば)と言いながら、N夫の後ろに従いました。

N夫、S子の掘った穴の中に、程よく水が入り、ドロドロの池のようになりました。さあー、それを一目見たMちゃんは、目を見張り、輝かせて、身体中で笑い、ヒラリと穴の中に飛び込んでしまいました。「オフロ、オフロ。イイキモチ、イイキモチ」と、たどたどしいことばで言いながら、良い気持ちそうに、とっぷりと座りこんでいます。その穴は、Mを落し入れる筈だったのに、見当がはずれたS子、N夫は「Mちゃん、だめ、だめ」と大慌てです。仇討ちとして、Mに提供する筈だった穴が、思いがけない事から、Mにとっては喜びの穴に変わってしまい、ふたりは、困惑し途方に暮れてしまいました。

一方、Mは、泥を、手、足、身体中に、お化粧のように塗りたくります。(Mは、他の子たちと、朝からパンツ一枚になり、お洗濯遊びをしていた)とても御機嫌で「Aチェンチェ、Yチェンチェ、Sチェンチェ」と教師の名を呼びながら、ピチャッピチャッと、泥を手、足に叩き込んでいます。Mの躍動力にひかれてか、ひとり、ふたりと、周囲の子どもたちが寄ってきては、「あっ! Mちゃん、いいな、いいな」と見ています。時

どき、泥がはねたり、Mに摑まえられて「キャー」と少々大げさに逃げまわります。大勢の子どもとの交わりが嬉しくて、Mは「キャーキャー」と声を上げています。

その時、S子が「先生！　私もMちゃんのように、泥んこになりたいな」と言い出しました。S子の母親は、綺麗好きで、あれこれと口やかましい人です。S子は「帰る時には、一つも泥が付いていないように洗ってくれる？」と、幾分心配そうに聞きます。「泥が全然、ついていないように、洗って上げるわよ」「僕も、やりたい！」と、N夫が言いだしました。N夫の母親も、S子の母に勝る神経質な人です。「あと綺麗に洗ってくれる？」「ハイ、OK」と、私が指で丸をつくって承知すると、S子、N夫、F子たちは、お部屋へ急ぎ駆けて行きました。

やがて、パンツ一枚になったS子・N夫・他の子たち数名が、身軽になってとんできました。Mちゃんの体で白い部分は、顔だけになって「Sちゃん！」と立ち上がり、両手を万歳させて、大変に見事な歓迎ぶりに、一同、一瞬「ウワーッ」と立ちどまりました。けれども、Mが嬉しくて、嬉しくて踊り出したすきに「わあ！」と言いながら、子どもたちは、小さな穴の中に滑り込みました。穴はもう平らにちかく、ドロドロの田圃のようです。Mと同じように、互いに、身体に泥をつけ合ったり、自分の身体に叩き込んだりです。

プール・水遊びの時の先陣を切るのは、いつもMちゃんです。シャワーで乾いた身体を濡らす時、プールの水に入る前に身体を堅くし、決断をしかね、ひるんでいる自分たちの前で、Mちゃんは、何の苦もなく率先して、まるで蝶のように、ヒラヒラと、喜びと、希望をこめて、舞うように冷たい水の中に、身を呈するMちゃんです。そんな時、全員の子どもたちは、子ども特有の自己主張もなく、他者否定もなく、非常に素直に、尊敬の意を表わして、Mちゃんに全員脱帽するのです。

この日も、Mちゃんの泥遊びぶりには、他の子たちは、手も足も出ません。Mは、泥遊びにかけては、誰にも負けない年季が入った立派な泥職人です。白い所は顔だけのMに比べて、他の子たちは、むらむらな泥だらけの身体です。Mに抱きつかれたり、引っぱられたりで、子どもたちは、泥と水と人間の戯れによって、原始人の深遠な心性に返ってしまったようです。おとなである教師は、手も足も出なくなってしまいました。自然との交わりの中で、子どもたちの人間関係は、助け合い、いたわり合っているようです。

Mへの仇討ちが、思わぬ方向に発展してしまいました。泥に

かけては第一級の職人・Mちゃんを先頭に、或る時はお風呂になったり、或る時は泥んこ練り屋になったりで、狭い田圃が広びろと広がり、S子、N夫、F子はとうとう、ミイラ取りがミイラになってしまったようです。

降園時、グループに分かれておやつをいただきました。驚いた事に、その日のグループに、S子、N夫、F子、Mがちょこんと座っています。他の子ども数名もまじえて、グループを組んで楽しげに語り合っていました。

それ以後も、今だに、Mは、時どきF子の髪を引っぱります。けれど、髪をちょんと引っぱっては、F子の顔を覗き込んで、ニコッと笑うのです。F子は「先生、Mちゃんが私の髪の毛を引っぱって、笑ったよ」と言いにきます。

私たち教師が、M、F子の関係を、ああか、こうかと願ったり、思考した事を振り返ってみますと、結果的には、MとF子の〃仲よしごっこ〃を願っていたようです。

この泥遊びを通して、幾つかの問題を上げ、教師会で話し合いました。一つには、教師が共に泥遊びに入っていたとしたら、又、違った立場から、子どもたちが、心の奥底で感じとめ、味わった味を、私たちも又、味わう事ができたろう。（けれどあの時、子どもたちは、遠い原始の人になって、私たちおとなから遠くの世界の人になってしまった）又、この泥んこ遊びをさせ放題にして、教育的怠慢があったとは思えない。子どもたちは、自分と友人との関係が、泥を媒介として、優しく、素直な結びつきをもち、そして、互いに許し合い、あの狭い田圃が無限な広がりをもって遊んだ事である。私たちおとなの狭い力量を乗り越えて、広い子どもの世界で、F子、Mは自然に接近をした。

以上の事ごとも、四月以来、私たちが、ああかこうかと思考し、実行した積み重ねが、何かの土台になって働いた事も、思い合わせて話し合いました。

「遊び」とは、最高級の学習である事を（子どもにとっては、学習ではない）今更に、感じている次第です。

（霊南坂幼稚園）